



教育長あいさつ

狛江市教育委員会 教育長 柏原 聖子

本校は、狛江市教育研究奨励校として、「主体的な学習を通じたESDの実践」～『学習者が主体となる授業』の実践～をテーマに研究を進められました。

中学校学習指導要領総則で示されているとおり、子供たちが学習内容を社会と結び付けて深く理解し、よりよく生きるために求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることが求められています。

また、「持続可能な開発のための教育」（以下ESD）は、身近なところから行動を開始し、学びを実生活や社会の変容へとつなげることがESDの本質であり、社会的自立はもとより、多様な人々と協働しながら社会を創る力の育成を目指して取り組むことが重要です。

本校は、令和4年度から「ESDの視点を取り入れた学校教育の充実」を校内研究の重点に置き、令和5年度からはより具体的な内容として「ESDを通じた主体性の獲得」をテーマに更に研究を推進されました。そして、育てたい生徒像を「主体的・協働的に課題解決に向けて行動する生徒」と設定し、「思考力」、「問題解決能力」、「合意形成し協力・協働する態度」の3つの力を育成してきました。

また、年間指導計画をESDの視点から捉え直し、3つの力を系統的に指導できるようESDカレンダーで可視化し、各教科の関連と総合的な学習の時間の充実を図り、学習者が主体となる学びの仕組みづくりを行ってきました。

今後も、主体的な学習を通じた教育活動が狛江市全体に広まり、よりよい社会の創り手とグローバルに活躍できる生徒の育成につながることを期待しております。

校長あいさつ

狛江市立狛江第一中学校長 吉田 知弘

本研究のスタートである令和4年度、私たちは「SDGs達成に向けた、ESDの視点を取り入れた学校教育の充実」に取り組みました。育てたい生徒像にも「環境や社会に関心を持ち」「自他を尊重し」「未来の自分を育成できる」「課題解決に向け自ら行動する」といった文言が並びました。もちろんこれらの内容はSDGsの達成に向け、とても大切なことばかりです。しかし研究を進めていく段階で、改めて「では本校生徒の実態は？」と考えたとき、「主体的」「協働的」といったキーワードが出てきました。これらは、コロナ禍の影響を大きく受けた現在の中学生がこれまでの学校生活で「体験活動」や「仲間たちと協力しながら何か一つの物をつくり上げる」といった活動を大きく制限されてきたが故の、つまり生徒たち本人のせいではなく、機会そのものがなかったことに起因する現状と考えました。そこで本校では、まずは総合的な学習の時間で、次に各教科等で生徒たちの主体的な学びを実現させる授業づくりに取り組みました。途中、何度も進路変更を繰り返しながらの研究活動となり、全員で立ち止まって考え込んでしまう場面もありましたが、本日これまでの研究結果を皆様にお見せする機会をもてたことをたいへん嬉しく思います。そしてさらなる教育活動の充実に向け、本日の発表をご覧いただいた皆様方から多くの御指導、御意見をいただければ幸いです。

結びに、研究の推進にあたり3年間という長期間、講師をお引き受けくださいました全国小中学校環境教育研究会 顧問 棚橋 乾 先生に心より感謝申し上げます。そして、本校教員とともにたくさんの体験学習を作り上げてくださった外部講師の方々をはじめ、御指導、御助言をいただきました多くの皆様方、そして貴重な研究機会を与えてくださいました狛江市教育委員会に深く感謝申し上げます。

研究主題

主体的な学習を通したESDの実践

～「学習者が主体となる授業」の実践～

(1) 研究主題設定の理由

2020年から始まったコロナ禍。教育活動の多くが制限され、学校教育においても、生徒が自ら選択し、自ら決断する機会も大きく減少した。その影響からか現在の中学生には主体的に学び、主体的に活動する、いわゆる「主体性」がコロナ前に比べて乏しいと感じている。本校では生徒たちの主体性を引き出し、さらにそれを高めるため、令和4年度に、「SDGs達成に向け、ESDの視点を取り入れた学校教育の充実」をテーマに研究に取り組んだ。また、令和5年度は「SDGs学習(ESD)を通した「主体性」の獲得」をテーマに生徒の主体性をより一層高めるための研究と学校教育の充実に努めてきた。この取組では、生徒を主体とするアクションプランを作成し、生徒が主体的にTake Actionすることで生徒の主体性を伸ばすことに一定の成果を上げられたと考えている。これら2年間の実践を踏まえ、本年度は、さらなる主体性の高まりを教科指導のなかでも実践していくことを目標に、上記の研究主題を設定し、研究に取り組んできた。

育てたい生徒像

主体的・協働的に課題解決に向けて行動する生徒

【育てたい資質・能力】

- ◇思考力(内省的、創造的、批判的、多面的、論理的)
- ◇問題解決能力(探究力)
- ◇合意形成し協力・協働する態度

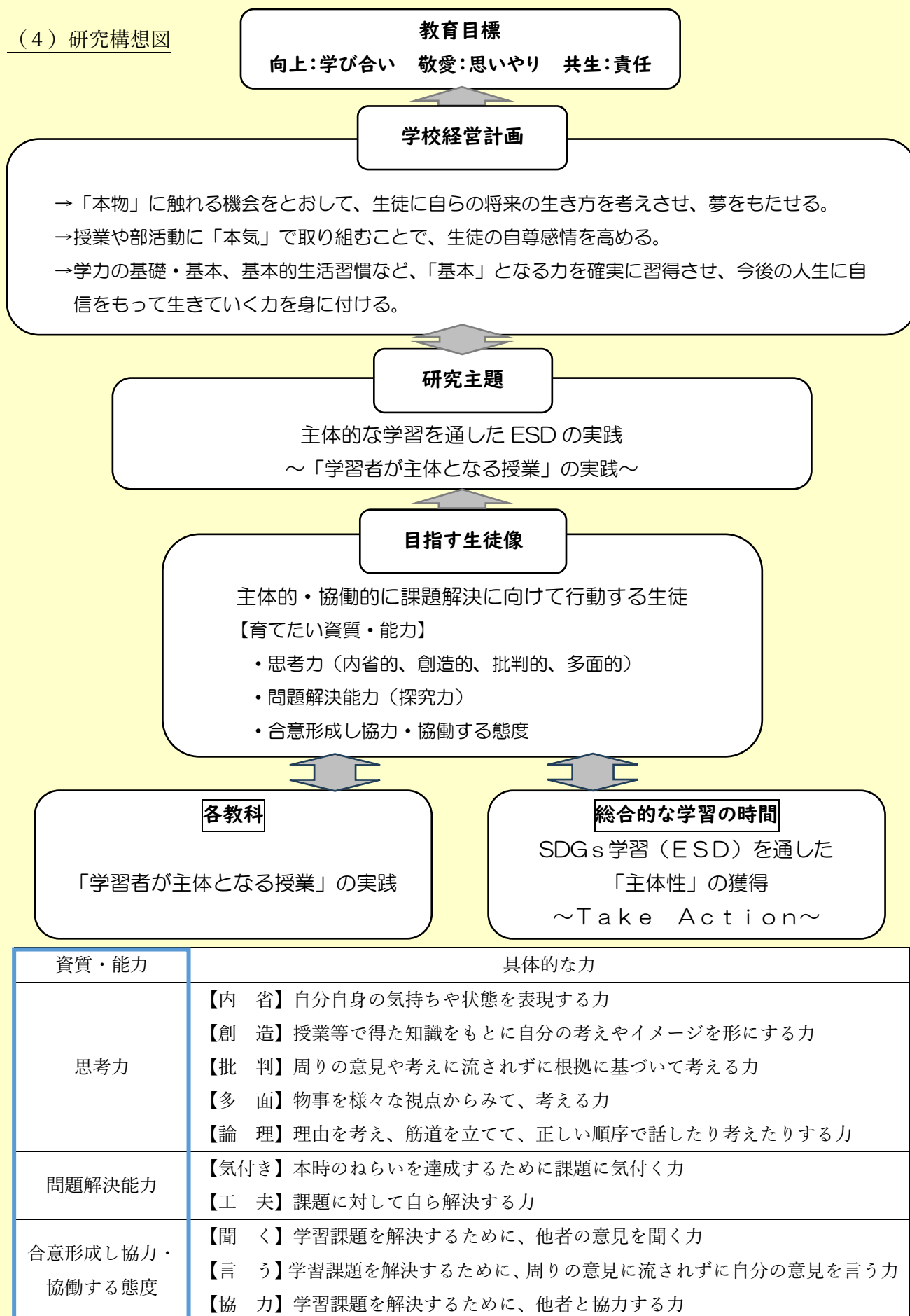
(2) 育てたい生徒像の設定理由

ESDは知識・理解に留まらず、学びを活かし、様々な問題を「自分の問題」として行動する「実践する力の育成」を目指している(文部科学省ホームページより)。そこで本校では、「主体的・協働的に課題解決に向けて行動する生徒」を育てたい生徒像として設定し、必要とされる資質・能力として「思考力」「問題解決能力」「合意形成し協力・協働する態度」の3つを取り上げた。また、「学習者が主体となる授業」を実践すべく、「学習者が主体」となっている状態を「得た知識をもとに、生徒自らが意欲的に学習課題を解決する状態」と定義し、研究を進めた。

(3) 研究仮説

日々の授業において意図的に「思考力」「問題解決能力」「合意形成し協力・協働する態度」の資質・能力を身に付けさせていくことで、様々な問題を「自分の問題」として行動する「実践する力の育成」を図ることができるだろうという仮説を立て、「思考力」「問題解決能力」「合意形成し協力・協働する態度」の3つの分科会を設定し、授業研究を進めた。また、各教科の年間指導計画をESDの視点から捉えなおし、「思考力」「問題解決能力」「合意形成し協力・協働する態度」の3つの力を系統的に指導できるよう、ESDカレンダーを作成した。

(4) 研究構想図



この視点で3つの分科会を設置

資質・能力	具体的な力
思考力	<p>【内省】自分自身の気持ちや状態を表現する力</p> <p>【創造】授業等で得た知識をもとに自分の考えやイメージを形にする力</p> <p>【批判】周りの意見や考えに流されずに根拠に基づいて考える力</p> <p>【多面】物事を様々な視点からみて、考える力</p> <p>【論理】理由を考え、筋道を立てて、正しい順序で話したり考えたりする力</p>
問題解決能力	<p>【気付き】本時のねらいを達成するために課題に気付く力</p> <p>【工夫】課題に対して自ら解決する力</p>
合意形成し協力・協働する態度	<p>【聞く】学習課題を解決するために、他者の意見を聞く力</p> <p>【言う】学習課題を解決するために、周りの意見に流されずに自分の意見を言う力</p> <p>【協力】学習課題を解決するために、他者と協力する力</p>

各分科会の取組



◆ 「 思考力 」 分科会

分科会の方向性

第1回アンケートでは、批判的・論理的な思考力の数値が低い結果となった。批判的・論理的な思考力を育成するためには、自己から周りや他者へ目を向け、疑問をもったり、自分と異なる考えや立場の人に対して、根拠を明確にし、論理的に自分の考えを伝えたりする力が必要である。したがって、本部会では「自己表現力を身に付けるための授業」を実践することで生徒の思考力は高まるのと考えた。

取組

生徒が自己表現力を身に付けるために、表現活動の場面を取り入れた以下の①～④の授業づくりを実践した。①観察や創作の計画を立て、進行管理や制作を工夫する創造的な思考力を育成する授業。②聞き手を意識して自分の考えを発表し、聞き手からの質問に回答する多面的・論理的な思考力を育成する授業。③協働学習ツールを活用し、他者の考え方やまとめ方に触れる多面的・批判的・論理的な思考力を深める授業。④振り返りの時間を十分に確保し、学習内容を自分自身に落とし込む内省的な思考力を深める授業。

成果と課題

(成果) 第3回アンケートの結果、特に第2・3学年が批判的・多面的・論理的な思考力の数値が向上した。また、各教科の授業者からは授業改善を通して、以下のような生徒の変容が見受けられたと記載があった。「生徒が問題点に気づき、解決するために、自分の考えを意欲的に表現する力が伸長した」、「意見交換を通して、他者の意見に触れたり、受け入れたりして、新たな考えを構築する対応力が身に付いた」、「他者の意見を多面的に捉え、矛盾点や根拠の不足を見抜き発言できるようになった」、「総合的な学習の時間では、SDGsの取組(第3学年)や粕江調べ(第1学年)の発表の際、論理的に自分たちの考えを説明することができた」、「生活面では、委員会や当番活動を円滑に進めるために友達に声を掛けたり、保健室を利用する際に自分の体調不良や怪我の経緯を順序立て説明したりできるようになった生徒が増えた」などである。これらの生徒の変容から、生徒は自己表現力を身に付け、学校生活で活用していることが分かる。

(課題) 生徒が他者の意見の矛盾点を指摘し共に修正したり、自分の考えの根拠不足を補い、改善した意見を人前で論理的に説明したりすることはまだ不十分である。これらの力を身に付けるために、授業者が、活動のねらいや根拠をより明確に提示して授業実践をする必要がある。また、本研究を遂行する中で、授業者が「どんな視点をもって学習すると、生徒に『内省的』『多面的』『批判的』等の思考力が身に付くか」を生徒に説明することの難しさを感じた。改めて、授業者がこれらの言葉の理解を共有した上で、引き続き、生徒が主体的に思考できる授業づくりを実践していく必要がある。



◆ 「 問題解決力 」 分科会

分科会の方向性

生徒が課題に取り組む際に「気づき」(自ら課題や問題点を発見すること)を得る機会と、その解決方法を「工夫」(試行錯誤することや独自の発想で問題解決に取り組むこと)するプロセスを意識的に取り入れることで、生徒の問題解決力が向上すると考えた。

取組

「気づき」における授業改善を通して、導入部分で①気づきのポイントを伝え、②生徒が学びの意識を高めることや、③設問を分かりやすくし、④生徒が疑問に思う仕掛けを作ることで興味を引き付ける工夫を施した。例えば、社会科では生徒が今どんなことを考える場面なのか、どんなことをする場面なのかを示したマグネットシートの活用である。また、英語科では通常の音読ではなく群読を行い、自分たちの音読がどうなればよくなるのかを考える場面を設けたことである。

「工夫」においては効果的な学習支援をしたり、生徒が振り返りシートを記入・提出できるようにした。例えば、体育科においては生徒が動画を撮影することで自分の動きを客観的に分析できるような工夫

である。理科では生徒が章末に振り返りシートで、身の回りとかかわりについて気付いたこと、調べたことなどの記入、音楽科では生徒が主体的に取り組み、自ら探究するように、空の楽譜を用いてチームで学習する場の工夫である。

成果と課題

(成果) 生徒たちが協働的・多面的・批判的な姿勢をもちつつ積極的な意見交換が行えるようになり、多面的な視野、分析力、批判力が向上した。アンケートの結果としても「気づき」の項目においては、60%前後の生徒が「できた」と回答しており、「工夫」の項目においても同様の結果となった。また、各教科の授業者からは以下の意見が挙げられた。「体育科では自分では気付けない動作や他者の動きを知ることで動作がスムーズになった」、「英語科においては一人では進められない生徒たちも協働的に進められ、その中で合意形成する場面が多くあり、問題解決力が高まった」、「音楽科では自ら探究する姿が見られたことや各パートでの意見共有の場が多く設けられ、多面的に見る力や気付く力が身に付いた」などが挙げられた。

(課題) 生徒に十分な知識が定着しておらず、設定された課題や自身の問題点を見付ける力が未熟である場合、自分自身での解決を諦めてしまう生徒が見られ、他者を頼る生徒が増える傾向も少なからずあった。また、体育科においては改善点を理解していても、それを表現することが難しい生徒も見られた。

調べ学習の場面では、調べたいことを見付けられない生徒は他者に頼ってしまったり、インターネット上の情報から更に深めて探究しようとする姿勢や意欲が見られなかったりする傾向が強かった。学校全体や教科の学びの中で、生徒たちの探究する力を幅広い場面で活用できるような継続的な指導が難しい点も今回の取組の課題として挙げられた。教科や学年の垣根を越え、学校の教育活動全体を通して、「育てたい生徒像」を意識した指導が必要であることを本研究から見いだすことができた。



◆ 「合意形成し協力・協働する態度」分科会

分科会の方向性

「言う」(周りに流されずに自分の意見を言う)、「聞く」(他者の意見をしっかりと聞く)、「協力」(課題を解決するために他者と協力する)の能力を高めることで「合意形成し協力・協働する態度」が育まれると考えた。その取組を進めていく中で、第1回生徒アンケートでは、「学習課題を解決するために、周りに流されずに自分の意見を言う」の項目が低かったため、そこを改善できるように重点的に取り組んだ。

取組

生徒が周りに流されずに自分の意見を言う力を身に付けるために、以下の3点を踏まえ、話し合い活動の場面を取り入れた授業づくりを実践した。①ある課題に対して協働学習ツールを活用し、ペア学習や少人数グループで役割分担して、考え、意見を伝え合う時間を設ける。②全体で共有する場面では、聞く側にも相手の意見をよく聞き、発言できるようにめあてを提示する。③クイズやゲーム形式の場面では生徒一人ひとりが発言できる機会を設け、全員が授業に参加できるようにする。

成果と課題

(成果) 特別支援学級においても、授業の中で「ペアやグループで意見を伝え合う」又は「協働学習ツールを活用し、自分の考えを記入する」場面などを設定することで、人前で発表することに苦手意識があった生徒たちも、自分の意見を伝えることへの抵抗感が減り、発言する場面が増えた。その結果、一人ひとりが自分の役割を担当することで、責任感や意欲をもって協力的に活動に取り組む姿勢が見られた。

(課題) 自分の考えを周りの意見に流されずに伝え合い、合意形成できるようになったが、意見が増えることによって、様々な意見をまとめたり、整理することに難しさを感じる生徒が出てきた。今後は合意形成し、協働する態度を醸成するために「話し合いのテーマや目的を明確にする」「共通点や相違点を見付ける」などの意見のまとめ方を指導する必要がある。

今年度実施した研究授業の様子



【 研究授業 1 6月12日 】 「思考力」分科会

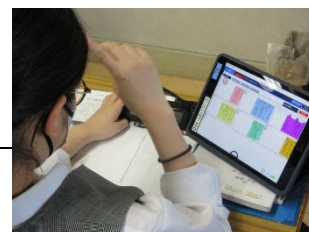
教科「国語」

単元名 第2学年「メディアを比較し、その特徴を理解しよう。」

本授業を通して育てたい生徒像

- (1) 情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うことができる。
- (2) 観点を明確にして文章を比較し、文章の構成や論理の展開、表現効果について考えることができる。
- (3) 言葉がもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にして、思いやりや考えを伝え合おうとすることができる。

→ (1) ~ (3) の単元目標を達成するために「新聞記事を読み比べ、発言者の意図を考える」ことができる生徒の育成を目指した。



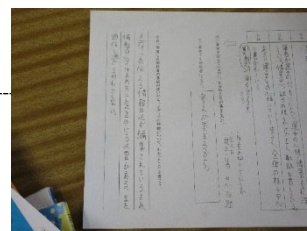
研究実践の手立てや工夫

今回は、日頃、生徒が手に取って閲覧することが少ない新聞記事を副教材として、既習の説明的文章の構成「序論・本論・結論」、構造「問いと答え」、「事実と意見」、「原因と結果」、説得力を増すための図表の役割、題名の重要性、目的に応じた表現の知識を活用することなどを指導した。具体的には、多面的な見方を生徒に身に付けるために、同じ事柄を扱った3社の新聞記事を、「観点を明確にして主体的に読み比べる授業」を行った。また、生徒が意欲的に学習課題を解決する授業を実践するためのツールとして、協働学習ツールを活用し、新聞記事の比較を分かりやすく整理することに役立てた。

成果と課題

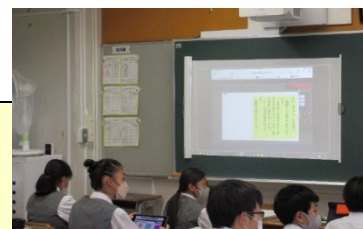
(成果)

生徒の振り返りシートから「①多面的に思考するということは、対象を比較し、客観的に捉えることであると授業内で実践して理解することができた。」「②多面的に思考するためには、既習事項を活用し、主体的な姿勢で学ぶことが重要であると改めて気付いた。」という記述があり、多面的・創造的な思考力を高めることができたと考えられる。



(課題)

今回の第2学年の授業で身に付けた「多面的に思考する力」を、第3学年の「批判的に思考する学習」に繋げていく。「対象を比較し、客観的に捉える力」を活用し、さらには、「何に注目して思考し、理解したかを説明できる力」を生徒に身に付ける授業を実践していく。



【 研究授業 2 7月17日 】 「問題解決力」分科会

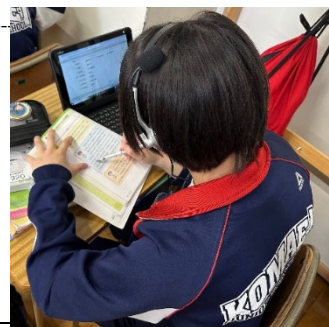
教科「英語」

単元名 第3学年 「AI Technology and Language」



本授業を通して育てたい生徒像

生徒たち自身が設定した学習課題を計画的に解決して
いく中で、主体的にその学習課題に取り組む生徒の
育成を目指した。



研究実践の手立てや工夫

「個別最適な学び」を大切にし、各単元を約10時間で進めていく中で、最初の3時間でICTを活用した自由進度学習を取り入れた。ラウンドシステムを軸にした課題を4つ設定しているが、それらは生徒たちが主体的に取り組めば達成可能な範囲で設定しており、多くの生徒が3時間目まで楽しみながらも一生懸命に学びを進めた。



成果と課題

(成果)

音読の学習課題を何度も繰り返し挑戦する中で、本文中にある新出文法が運用されているメインセンテンスを自然な流れで発話できるようになった。また、「授業中に課題を解決できなかった生徒」がいなくなったことも成果と考える。

(課題)

前述の音読ではAIが生徒の発音を採点、判定する。そのため採点結果は即時で非常に分かりやすく、細かくなっている。しかし、判定結果を気にしている生徒が多く、すぐに課題の再挑戦を試みてしまう傾向があった。課題に取り組む中で気付いた自身の改善点に対してどのように向き合い取り組んでいくのかを考察することがより大切であることを生徒たちに伝えていく必要がある。

【 研究授業3 9月18日 】 「問題解決力」分科会



教科「社会」

単元名 第1学年「ユーラシアの動きと武士の政治の展開」

本授業を通して育てたい生徒像

教師からの答えを待つのではなく、自ら主体的に教科書や資料集を調べたり、生徒同士で意見交換を行ったり、自ら導き出した考えをプリントに書いたり発表したりするなどして、自らの力で課題を解決していこうとする生徒の育成を目指した。



研究実践の手立てや工夫

問題解決力を高めるために、毎時間「その立場になって考える」設問を設定し、武士の立場や朝廷の立場などそれぞれの役割を把握した上で、「課題は、何だったのか」「どうすればよかったのか」ということを考える授業を行った。また、課題を解決させるために持続可能な社会を意識させ、グループ学習やペア学習、パネルディスカッションなどの協働学習を取り入れた。

生徒が意欲的に学習課題を解決する授業を実践するためのツールとして、協働学習ツールを活用し、発表資料や発表原稿を作成し、グループの中で共有できるようにした。



成果と課題

(成果)

生徒の振り返りシートから「①授業前と授業後に考えた鎌倉幕府の課題では全く異なる視点で幕府を見ることができた。」「②多面的に考察する力が身に付いた。」という記述があり、生徒は他のグループの発表を聞いたり、学習課題を解決するために調べたりすることで新しい疑問をもち、考えを深め、生徒自身が、その課題解決するために学習する「問題解決力」の向上を図ることができた。

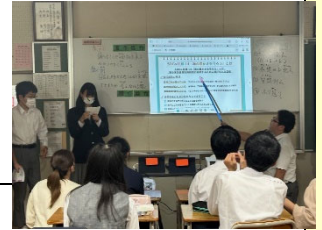
(課題)

今回の授業で身に付けた「問題解決力」は、学年を重ねるごとに高められるよう「立場になって考える」ことができるように継続的に指導をすることが必要である。継続的に指導するためには、設問の工夫といった教科指導だけではなく、学校の教育活動全体を通じた指導や取組が必要だという意識を教員がもつ必要がある。他の分科会で育てている合意形成能力や思考力も高められれば生徒はより主体的に行動することができると思う。引き続き「生徒主体の授業」を意識した授業実践を行っていくことが大切である。

【 研究授業4 10月23日 】 「合意形成し協力・協働する態度」分科会

教科「総合的な学習の時間」

単元名 第1・2・3学年（特別支援学級）「未来をつくる私たち」



本授業を通して育てたい生徒像

本授業では、特に、「合意形成し協力・協働する力（言う・聞く・協力）」に重点を置いて指導した。課題を見だし、自分事として捉え、解決に向けて仲間と協力して合意形成することができる生徒の育成を目指した。



本時における研究実践の手立てや工夫

本単元の初めに、日常生活の中で体験している問題（異常気象やゴミの分別等）を提示することで、課題を自分事として捉え、主体的に学習できるように動機付けを行った。その上で生徒が協力・協働してグループ学習に取り組むことができるよう、役割を分担した。また、個人で調べた内容をグループで共有した。グループで共有する際は、発言が苦手な生徒でも抵抗なく意見を言うことができるよう協働学習ツールを活用した。

前時までにはグループで合意形成した内容を発表する本時の授業では、発表側だけでなく聞く側にもめあてを提示することで、聞く側にも主体的に学習に取り組む意識をもつことができるようにした。

成果と課題

（成果）

役割分担をすることで、それぞれができる調べ学習を意欲的に行い、協力・協働して学習をすることができた。協働学習ツールを活用し、タブレット上で感想カードを共有したことで、たくさんの意見を認めることができた。また、聞く側の疑問や質問も多く、考えを深めることができた。

（課題）

合意形成に向けたテーマ設定の話し合いは、全員が納得するまでに多くの時間が必要だった。調べ学習の中では生徒がすべての情報を正しく判断することが難しいため、得た情報を精査させるといった細かな指導を十分に行う必要がある。また、特別支援学級の生徒にとって難しい言葉も多くあり、発表内容を正しく理解するために個別指導が必要となる生徒も数名いた。

総括(成果と課題)

本研究は学習者が主体となる授業の実践を通し、主体的な学習を通した ESD の実践を目的としている。この目的を達成するために育てたい資質・能力として挙げた「思考力」「問題解決力」「合意形成し協力・協働する態度」の3つの力を生徒に身に付けることで、生徒が様々な問題を自分事として捉え、問題解決のために行動できる実践力の育成に取り組んだ。また、前述の3つの資質・能力を具体的な指導の場面において効果が上がるよう、育てたい資質・能力を具体的な力として細分化を行った。

成果

「協働的な学習」を行う基盤の構築

生徒に実施した第3回アンケート(令和6年11月21日実施)の結果からは、「内省」「聞く」「協力」において(5段階中)4.03~4.28という高い結果を得た。これらの項目から、「自らの気持ちを表現すること」「他者の意見を聞くこと」「他者と協力すること」に高い資質・能力があり、生徒は「協働的に課題解決に向けて行動できるようになった」と言える。

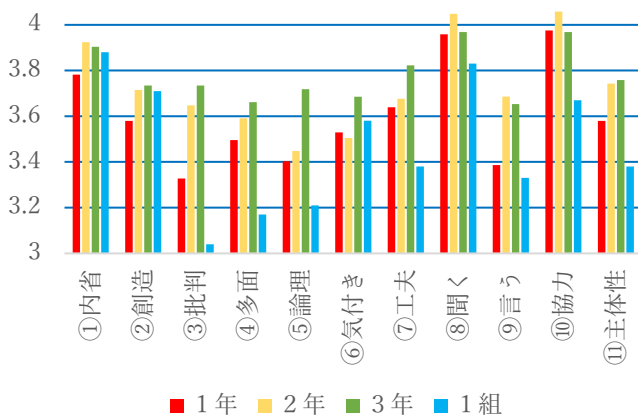
「自己表現力」を高め、主体的・協働的に学びに向かう態度の醸成

活用しながら自己の意見を明確に伝える表現力の進歩が見られた。

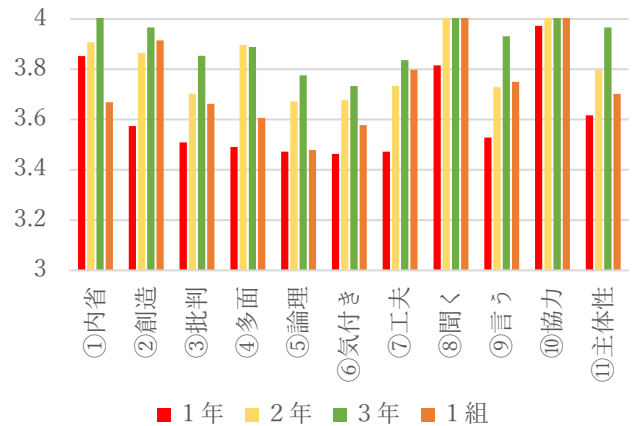
また、第1回アンケート(同6月17日実施)結果で表れた低評価の

項目を改善するため、思考力分科会においては「批判」「多面」「論理」を、問題解決力分科会においては「気付き」を、合意形成し協力・協働する態度分科会においては「言う」の指導を強化した。成果として第1回か

第1回 アンケート結果(6月17日)



第3回 アンケート結果(11月21日)



ら第3回アンケートにおいて、「批判」70ポイント、「多面」33ポイント、「論理」27ポイント、それぞれ上昇するなど、生徒が問題点に気付き、解決するために、自分の考えを意欲的に表現する力が伸長した。また、「気付き」においては12ポイントの上昇が見られ、生徒の学びの意識を高めることができた。「言う」では13ポイントの上昇が見られ、ICTツールをこれらの結果から、本研究を通し、課題を自分事として捉え、課題解決に向けて思考し、協力・協働しながら取り組む力が着実に身に付いたと考えられる。特に「内省」や「言う」など自己表現力を高めることで発言機会を増やした生徒たちが、学習過程の協働的な学習において自己有用感を得ることで自己肯定感を高めたことが、自信をもって主体的に学習に取り組む態度の醸成につながったと考えられる。

課題



発達段階に応じた体系的な指導の必要性

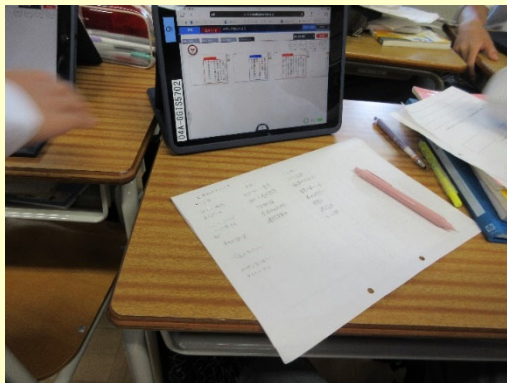
第3回アンケート結果から評価値は第1学年においては伸び率が低く、第3学年になると高くなることが分かった。このことから、本研究の取組には一定の効果が表れるが、発達段階に応じて体系的に指導するの必要性を感じた。そのためには本研究の取組の1つである ESD カレンダーの活用が、効果的であると考えられるため、今後は ESD カレンダーの質の向上に努め、学校全体でねらいの共通意識をもって取り組んでいく必要がある。

学びへの意欲を減退させない指導の工夫の必要性

研究に取り組んだ本校教員の意見からは「自分で他者との考えの違いに気付くが、知識が足らず工夫を加えられない生徒」や「改善点を理解しても、それを改善できず意欲が減退する生徒」の存在が指摘された。動機付けが十分な生徒は意欲的に学習課題に取り組むが、取組の過程で上手くいかなくなってしまうと、そこで学習を諦観してしまう姿も見受けられた。このことから、教員が生徒に寄り添った指導・支援を行い、生徒が「分かる」「できる」を実感し、学びへの意欲を減退しない指導の工夫や、学習導入時に高めた学習意欲を学習過程の中で更に高めるサイクルを生み出しながら、学習課題の解決に結び付ける必要がある。

多様な意見を整理し、生産的にまとめる力を育成する必要性

生徒の自己表現力が高まったことで、より多くの意見が学びの場に出されるようになったが、それを整理し、生産的にまとめる力を育成するの必要性を感じた。生徒は意欲的・主体的に学ぶ中で自己表現する機会を増やし、多様な意見が学びの場で生まれるようになってきている。しかし、それを合意形成し、協働的な学びの中で課題解決につなげるためには、意見を整理する力やまとめる力が不可欠である。これらの力を育成するために、教員はお互いの授業を観察し、意見交換を通して授業改善に繋げるなど、学校全体で組織的に取り組んでいくことも必要である。



【御指導いただいた先生】

全国小中学校環境教育研究会 顧問	棚橋 乾 様
狛江市教育委員会 教育長	柏原 聖子 様
狛江市教育委員会 指導室 理事兼指導室長	松岡 弘悟 様
統括指導主事	柳田 裕司 様
指導主事	吉田 浩幸 様
指導主事	平井 政知 様
狛江市教育支援センター センター長兼研修部長	美谷島 正義 様

研究に携わった教職員 令和6年度

◎研究推進委員長 ◇研究推進委員

校長 吉田 知弘		副校長 宮島 誠		
国語科	吉田 香	伊藤 絵里子◇		
社会科	野崎 浩	橋本 晋 ◎		
数学科	谷口 典夫	安井 豊人	河原 健太郎◇	谷川 洋史
理科科	池田 清信	石橋 奈都子◇		
音楽科	益子 裕美			
美術科	中野 陽子			
保健体育科	前田 恭伸	栗城 隆司◇	原口 亜子	
技術家庭科	栗田 命(技術)			
外国語	千ヶ崎 久夫	西村 景	榎本 貴子	木下 未来
特別支援学級	春日 知子	菰田 沙矢佳◇	若佐 裕太◇	猪野 真成
	伊藤 彩未	小山 智大		
養護	菊地 幸子			
不登校対応巡回教員	大橋 弘子			
学校司書	芝宮 亮子			
特別支援教室専門員	栗原 恭子			
事務	白石 奈津美	川端 貴久美		
一般作業	田代 孝子			
介助員(特別支援学級)	余川 眞弓	久方 翼	赤木 七海	高橋 美穂

